

## 論文審査結果の要旨

本論文の内容は公開発表会（平成28年8月9日午後1時30分から4時 文学部会議室）において説明がなされ、質疑が行われた。その際の質疑の主な内容は、以下の通りである。

### 【第1章】

- ①上人ヶ平窯跡と新池窯跡の比較について、その共通性の意味するところは何か。
- ②埴輪製作者と土師器工人との関係は具体的にはどのようなものか。土師氏や土師部について検討する必要があるのでは。

### 【第2章】

- ③有畦式平窯の成立過程で、問題となる梅谷瓦窯の異なったタイプの窯構造の位置づけはどうか。
- ④この過渡的な窯のタイプはダイレクトに中国から入ってきたと考える方がよいのではないか。

### 【第3章】

- ⑤大型建物が多数整然とならぶ意義は何なのか。さらに生産工房の違いが建物の差として現れているのではないか。
- ⑥西田中遺跡の事例から、藤原京の時期の瓦生産もまた高く評価すべきではないか。

### 【第4章】

- ⑦瀬後谷窯跡の供給先はどこか。必ずしも貴族の邸宅とは言えないのでは。
- ⑧他の平城宮や官寺の造営のための瓦窯との違いが明確なので、官とは異なる生産を推定できるのではないか。

### 【第5章】

- ⑨篠窯の経営に対する丹波国府との関与はどのように考えられるのか。
- ⑩小型窯については、さらに出土状況や製品から性格を検討できないのか。

以上の質疑に対して、①そもそも生産の規模が違うので簡単に比較することはできないが、ともに王陵の造営以後に中小古墳に埴輪を供給することが共通性である。②土師氏についての議論は承知しているが、言及できる材料がないので触れなかった。③窯構造が多様であり、行きつ戻りつするように見えるのが、試行錯誤の状況を示していると考えており、④については朝鮮半島には目を向けていたが、中国の事例については調べていなかった、とのことであった。⑤は、さらに意味を考えてみる必要があるとともに、⑥藤原京を評価しなかったのは上原真人氏の説によっていたため、見直しが必要と考えると返答した。⑦瀬後谷窯跡の供給先については、さらに最新の情報を得て、検討を加えていく必要がある。それによっては、⑧の生産の性格差も考えていきたいということであった。⑨国府の関与は直接的に示すのが難しいけれども、亀岡市内の各遺跡の消長や篠窯跡の製品の供給から考えられるとし、⑩の小型窯の資料については、調査時の認識不足から十分に情報が得られておらず、今後の調査に期待したいと返答している。

以上の質疑応答のほかにも、個別的な内容の確認などについて質疑をおこない、すでに筆者の考えが定説化している部分などについては、その経過も研究史として示した方がよかったのではないかという意見も出た。このように表現については、さらに改めるべきところもあると考えられるが、質疑を通して、筆者の独創的な点や、それが学界に定着していた状況が確認でき、さらにこれから検討すべき課題もあぶり出された。生産の背景をなす歴史事象との関係もさらに考察すべきであるが、本論文は、基礎的な調査成果を十分に咀嚼し、そこから導き出される確実な事実を積み上げ、奈良時代の都城向けの瓦生産や平

安時代の中心的な窯業生産地の動向を明らかにした点で高く評価できる。筆者の意見は、すでに学界で定着しているものも多く、本論文の基礎の上に今後の研究が展開していくものと推察する。このように学界に対する寄与も大きいので、本委員会は本論文が博士（歴史学）の学位論文として価値あるものと認める。